



Title	佐藤春夫「都会の憂鬱」試論：経済とジェンダーの観点から読む「家」の物語
Author(s)	鄧, 矜
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

佐藤春夫「都会の憂鬱」試論

—経済とジェンダーの観点から読む「家」の物語—

日本文学 博士前期課程 2 年

鄧 羚

一、「都会の憂鬱」の読まれ方と本稿の問題意識

本発表では佐藤春夫の小説「都会の憂鬱」(『婦人公論』、一九二一・一から一二連載)に着目し、この作品を経済的観点、およびジェンダー的視点から再検討する。そして「家」をめぐる経済的観点、およびジェンダーの視座から改めて分析を行うことによって、「都会の憂鬱」を従来おかれていた〈憂鬱の文学〉という磁場から引き剥がし、新たな評価軸を提示しようとする。

佐藤春夫は「西班牙犬の家」(『星座』、一九一七・一)、「李太白」(『中央公論』、一九一七)、「田園の憂鬱」(『黒潮』、一九一八・九)などの発表によって、小説家としての地位を確立したと評されている。この一連の初期小説の同時代評において、「詩人らしい情緒」¹と「豊富なる空想」²二点が、作品評価の根拠や理由として用いられた。

その評価軸は、その後も引き継がれ、今日でも憂鬱の心象風景と幻想・幻視・幻聴を軸にした「田園の憂鬱」を彼の代表作、ひいては彼の小説の頂点として位置づける論考がしばしば見られる。

其れ故に、佐藤春夫の作品中、「田園の憂鬱」の姉妹篇もしくは双生児であって、同時にその続編でもある」³「都会の憂鬱」は、この代表作「田園の憂鬱」の定評に強く規定され、影響された作品となっている。「都会の憂鬱」の先行研究も、「田園の憂鬱」の研究方向を踏襲し、主人公の憂鬱心理と性格に着目するものが最も多い。

この両作品は、いずれも「憂鬱」を主題とするため、「都会の憂鬱」が〈憂鬱の文学〉としてこれまで読まれてきたことには一定の説得性があるとは言えるが、しかし、両者は、別々の作品であって、特に「都会の憂鬱」の物語の場が、〈田園〉から〈都会〉へ移動していることは重要な変化である。

なぜなら、大正十年代において、〈都会〉という空間は単に物理的な意味上の場所ではなく、近代化、工業化、都市化が進む〈場〉でもあるからだ。さらに言えば、「都会の憂鬱」において、視点人物である夫は、最初の夫婦二人の暮らしから、最後には妻との離婚さえも考えるようになってしまう。すなわち、この小説には、婚姻と家の崩壊の物語が伏在している。私見によれば、この「都会の憂鬱」における「家」の成立と存続問題とは、経済問題であり、ジェンダーをめぐる問題として敷衍できよう。

¹ 江口渙「文壇一家言」『帝国文学』、一九一八年一〇月一日

² 谷崎潤一郎「序」『病める薔薇』、天佑社、一九一八年十一月二八日、i から ii 頁

³ 佐藤春夫「文庫版「都会の憂鬱」あとがき」『都会の憂鬱』、岩波書店、一九五五年三月五日、一六七頁

二、三つの名前を有する「妻」

佐久間保明は「都会の憂鬱」の特殊性について、以下のように述べる。

すなわち『都会の憂鬱』は春夫のそれまでの小説と異なり、登場人物の典拠がすぐにわかるようになっている。(中略)『田園』では名前のなかった主人公夫婦に『都会』でその名が与えられているのも、こうした視点から見直さなければならない⁴

佐久間氏の意見に同意するが、『都会』でその名が与えられている」のが、主人公夫婦だけではなく、「都会の憂鬱」では、古本屋の小僧と主人公夫婦の家族以外、登場人物がすべて名前という固有名詞を持っている。

「小説作家」⁵の江森渚山、「座長」の大川秋帆、「卒業論文を書く」久能、「小屋の楽屋頭取」の吉沢駒太郎など、登場人物の名前がよくその人物の職業と共に提示される傾向が窺える。つまり、誰にも属さない公の空間と不定の聞き手が多く存在する都会において、ある登場人物を紹介、特定するために、その人物の年齢、外見の特徴による説明だけでは不十分であり、名前と職業、及びその職業の収入や社会的地位の説明が不可欠である。

そして名乗った登場人物の中で、「瀬川瑠璃子」、「弓子」と「弓助」の三つの名前も有する「彼」の妻は最も注目すべき人物であると考えられる。

「彼」が彼女の劇場に訪れた時の「瀬川瑠璃子は居ませんか」の一言から、芸名であるが、今まで人称代名詞としてしか書かれていない彼女は、初めて固有名詞である名前を獲得する。

換言すれば、「瀬川瑠璃子」は特定の個人を弁別するために使用される記号だということだけではなく、彼女がこの芸名により、新劇座女優という職業、そして四十五円の月収も獲得していることも踏まえると、「彼の女」や「彼の妻」という「彼」、すなわち男性・夫に従属する〈モノ〉から、ある程度自分の主体性を取り戻すことに成功すると言えるだろう。

ところが、都会への移住により、彼女は職場に定着した一方、「彼」は「夢を託するもの」である「田園のひかげの薔薇」を失い、何も書けないことから自ら自分の「文学青年」の身分にも疑い続ける上に、父から勘当され、実家の金銭上の援助も失ってしまった。そして彼は自己認識が崩壊の危機を迎えた時に、自分のことを「女優の夫」と呼び始めた。

⁴ 佐久間保明「不遇な芸術家の面影—『都会の憂鬱』の動機と方法」『国文学研究』、早稲田大学国文学会、一九九二年一〇月

⁵ 本稿で使用・引用する「都会の憂鬱」は、特に断りのない限りすべて『定本 佐藤春夫全集 第四巻』（臨川書店、一九九八年五月一〇日）によるものになり、後に脚注を省略する

つまり外部との繋がりや収入が必要となる都会においての自立が失敗した「彼」は、ひたすら「家」の内部で自分のアイデンティティを確保しようとするようになったのである。

そのため「彼」が妻の実家を訪ね、妻の母との相談の場面では、彼女は再び「弓子」として登場する。

弓子は今でも自分で給金をもらっては居ても、たとひ銘仙でも着物ほどのものを自分勝手にこしらへるといふやうなことはなかったし、たとひ何を買ふにしてもその柄なり好みなりに就ては何一つ彼に相談しないことのない弓子であった。

無職且つ無収入であるにもかかわらず、彼は「妻」である弓子が「銘仙でも着物ほどのもの」を買うなら、「その柄なり好みなりに就て」自分と相談しなければならない、すなわち「弓子」が夫である自分の所属物であることを強く主張した。このように専ら彼女の「妻」という「家」の内部の身分を強調する行為は、男・夫であるという自己認識の回復への努力として想定できるだろう。

しかし、「彼」の男・夫である自己認識が造られた幻想は、すぐ彼女のもう一つで名前「弓助」によって喝破された。

「金はあるよ——おらあちゃんと弓助から捲き上げて来たからな。クッククッ」ゴドさんは怪鳥のやうな笑ひ方をした。弓助といふのはこの男が男衆のやうになつてゐると言はれてゐる女優の弓子のことであらう。

昔友人のゴドさんと再会する時に、家の内部に通用し、女・妻の記号である「弓子」が、明らかに男性性を持っている「弓助」へ転じ、そして男である二人の酒代も彼女「から捲き上げて来た」お金であると確認できる。つまり外部の第三者の目線から見れば、「彼」の代りに男・夫の役割を演じているのは彼の女であるに違いない。

三、書斎のない「家」

前節では、彼女の三つの名前に着目し、新劇座女優という新しい自己認識を確保した彼女に対して、「彼」の自己認識は「家」においての男・夫であることへの強調によってしか得られないが、外部の他者の判断によると、その自己認識の回復は、彼女が「弓助」と呼ばれる時点ですでに破綻への予兆が読み取れると論じた。

では、「家」の内部において、「彼」の男・夫である身分は果たして成立するのだろうか。

寒い風に吹かれた頬を赤くしながら、この快活な若い女は（中略）片手をのばして背後の障子を開けて置いてから、湯のたぎっている銅壺をつまみ上げるとそれを台所へ持って行った。台所の片わきにある時にはその茶の間の片隅に無性に押しつけてあるよごれた食卓を手早く処置して、そのよごれてゐた茶碗を洗って仕舞ふと、それを再び茶の間へ運んで来た。（中略）再び庭へ下りて行って先づ犬たちの食物を与へて置いた。

「南国で育った」「寒さに実に弱かった」「彼」は、自分を外にある「寒い風」から守るため、「一日中殆んど」「置炬燵にもぐってゐる」一方、仕事帰りの彼女は、その「寒い風」を室内に採り込み、男・夫の代りに家と外部の間に往来するのが明らかである。また表戸、茶の間、台所、庭、寝室で忙しく立ち回っている彼女に対して、「彼」は何もせず、下を向いて「少しづつ赤くおこって来る火を一心に見つめ」るだけで、自分の存在感を最小限に留めようとする姿勢も確認できる。

そして、ここでもう一つ目を配りたいのは、「彼」の「家」には「家父長制の場として・教養のある男性の居場所として特権的な意味を帯びた部屋」⁶である書斎がない。友人の江森渚山との面会、小説の創作など、そもそも男・夫である「彼」が書斎ですべき行為は、すべて茶の間の炬燵で行うしかない。つまり父からの仕送りを失い、彼女の扶養対象となる同時に、「彼」は男・夫の役割を担い得ず、「家」の中で書斎を保有する資格も喪失するに違いない。

またこの男・夫の位置を象徴する書斎の喪失に伴い、彼と妻との間に揉め事が絶えないようになってしまう。二人が家族の食事や団楽などに使われる茶の間で喧嘩した後、彼女は書斎と対峙する女・妻の〈場〉である台所、さらに職場へ逃げられるが、「彼」は茶の間の炬燵にこもるしかできなく、「家」の中での居場所さえも失っていく。

四、おわりに

本論では、「都会の憂鬱」を経済及びジェンダー的視座から考察し、「文学青年」の身分を失った「彼」と女優という職業をもった「妻」による物語を析出し、規範的なジェンダーや夫婦の役割分業からの逸脱を明らかとした。田園の持家から都会の借家へ移住した結果、「家」を維持する経済的な使用価値のなくなった「彼」は、「家」から疎外され、危機的状況に立たされるのは、当然の帰結である。

要するに、都会においての家庭生活を支える経済的基盤が欠けるため、彼の「家」とそこに依存する「彼」の男・夫である自己認識はいずれも不安定であり、その後の崩壊が想像できる。

⁶ 『漱石文学全注釈9 門』小森陽一・五味淵典嗣・内藤千珠子、若草書房、二〇〇一年三月三〇日、四〇頁